

理学の本棚

「地球・惑星・生命」

地球惑星科学とは、私たちを取り巻く自然の成り立ちを理解しようとする学問である。地球や生命とはなにかという根源的疑問の解明から、人類はどのように地球で暮らしていくべきかという社会に直結した問題の解決までをめざす学問ともいえる。地球惑星科学が対象とする事象は多岐にわたり、個別の対象の深い理解をめざし、様々なアプローチで研究が進められているが、これらの事象は地球という複雑なシステムのなかで起きており、すべてつながり、なんらかの関連をもつ。

本書は、日本の地球惑星科学コミュニティを代表する学会である日本地球惑星科学連合が、一般の方やこれから地球惑星科学を学ぼうとする方を対象に、地球惑星科学の全体像を理解していただくことを目的として、刊行したものである。「宇宙のなかの地球」、「生命を生んだ惑星地球」、「岩石惑星地球の営み」、「地球環境の現在、過去、そして未来」、



「人間が住む地球」の五部構成の中で、太陽系外惑星や「はやぶさ2」から、生命の起源、地球内部、地震や火山、地球史、社会と環境まで、様々な最先端の話題をまとめている。関連する学術論文も紹介されており、地球惑星科学分野の専門家や大学院生の方には、自身の研究テーマから少し離れた分野の最前線を理解し、改めて地球惑星科学を包括的に考える機会となる一冊である。専門外の皆さんにも、地球惑星科学が物理や化学、生物、情報といった多様な分野を背景に展開されていることがわかっていただけるのではないと思う。



日本地球惑星科学連合 編
東京大学出版会 (2020 年出版)
ISBN978-4-13-063715-2

温故知新

第14回

茅根 創
(地球惑星科学専攻 教授)

三四郎が訪ねた理科大学

漱石の「三四郎」に、九州から上京した東京帝国大学文科学生の三四郎が、理科大学（現在の理学部）講師の野々宮を訪ねる場面がある。弥生門から入った三四郎は、理科大学の建物の野々宮の研究室に行く。野々宮が「夜になって交通その他の活動が鈍くなるころに、この静かな暗い穴倉で、望遠鏡の中からあの目玉のようなものをぞくのです。そうして光線の圧力を試験する。夏は比較的こらえやすいが、寒夜になると、たいへんしのぎにくい、外套を着て襟巻きをしても冷たくてやりきれない」と説明するのを、三四郎は「驚くとともに、光線にどんな圧力があって、その圧力がどんな役に立つんだか、まったく要領を得るに苦しんだ」のだった。

理科大学：写真帖「東京帝国大学」明治33
(1900)年版（東京大学総合図書館所蔵）



「三四郎」は1908年の作品で、理科大学は現在の理学部1号館と同じ場所にあった。写真は、現在の工学部2号館のあたりから撮られたものであろう。左手が弥生門になる。

野々宮の実験室は地下で、写真では地面近くに明かりとり的小窓が並んでいるのが分かる。この建物は関東大震災で崩壊し、旧理学部1号館が1923年に竣工した。

漱石は、野々宮のモデル寺田寅彦に、海外でこんな実験があるときいて小説に取り入れた。寺田寅彦は「我が輩は猫である」でも、「ひたすらガラス球を磨る」水島寒月という理学士として登場する。野々宮の実験も、寒月の実験も、「三四郎」や「猫」の登場人物には、何の役に立つのかわからないことだらけであるが、漱石の眼差しは優しい。